

『淮南萬畢術』拾遺（三）

有馬 卓也

6 『如意方』（続き）

本号では『医心方』に収録された『如意方』全八〇条の残り三九条を提示する。今回提示する三九条の内、二九条（五〇〜七八）が『医心方』巻二六に見えるものである。葉徳輝の集本に見られた『医心方』と重複する『萬畢術』はすべて巻二六であったことを想起されたい。

〔42〕

【原文】

『千金方』金創血出不止、唾之、呪曰「ム甲、今日不良、爲其所傷。上告天皇、下告地王。清血莫流、濁血莫揚。良藥百裏、不如熟唾。」日二七度、唾之即止。（『醫心方』卷十八・治金創血出不止方第九）

【書き下し】

『千金方』金創に血出でて止まずんば、之に唾し、呪して曰く「ム甲それがし

①、今日良からず、其の傷つく所と爲る。上は天皇に告げ、下は地王に告ぐ。清血流ることなかれ、濁血揚がることなかれ。良藥百裏あれども、熟ねんろに唾するに如かず」と。日に二七度、之に唾すれば即ち止む。②

【注】

- ① 「ム」は「某」に同じ。「甲」は呪文を唱える人の名が入る。
- ② 注に「今案、『如意方』作若神唾。（今案ずるに、『如意方』は「神唾のごとし」に作る）」とあり、『如意方』に同文があったことがわかる。なお原本は「神若唾」に作るが、札記が「若神唾」と訂正しており、それに従った。

【現代語訳】

『千金方』金属による傷で流血が止まらない時は、傷口に唾を吐き付け、呪して「私□□は今日良くありません、そのため傷付けられました。このことを上は天皇に告げ、下は地王に告げます。清い血が流れることのないように、濁った血が揚がることのないように。良い薬が多くあっても、しっかりと唾を付けることには及びません」

と言う。一日に十四回傷口に唾を吐き付けければ、すぐに血は止まる。

【補】

- 「唾」と「呪(唾の効力を高める)」を併用した呪術系療法である。
- 『萬畢術』にも唾を使用する用例(二〇〇)、呪を唱える用例(四六)は見えるが、両者を併用する例はない。

[43]

【原文】

『如意方』。去黒子方。烏賊魚骨・細辛・栝樓・干薑・蜀椒・瓜蒂、分等、苦酒漬三日。牛髓一斤、煎黄色絞、以裝面。令白悅、去黒子。

〔『醫心方』卷二十一・治婦人面上黒子方第三〕

【書き下し】

『如意方』。黒子(①)を去る方。烏賊魚骨・細辛・栝樓・干薑・蜀椒・瓜蒂(②)もて、分等し、苦酒(③)もて漬くること三日。牛髓一斤もて、黄色に煎じて絞り、以て面に装す。白悦し(④)黒子を去らしむ。

【注】

- ① ホクロ。
- ② 順にコウイカの甲羅、ウスバサイシン(ミラノネ)、キカラスウリ、乾燥させたハジカミ、ナルハジカミ(フサハジカミ)、マクワウリの蒂(へた)。このうち細辛と瓜蒂は『神農本草経』の上薬に、烏賊魚骨は中薬に、蜀椒は下薬に記載されている。また、細辛と蜀椒については「死肌」を治すという記述が見える。
- ③ 醋(酢)。

④ 肌が白く輝くさま。

【現代語訳】

『如意方』。ホクロを取る方法。コウイカの甲羅、ウスバサイシン、キカラスウリ、乾燥させたハジカミ、ナルハジカミ、マクワウリの蒂を準備して、それを同じ分量ずつ酢に三日間漬ける。牛髓一斤を準備して、(それと合わせて)黄色くなるまで煮詰めてから絞って、顔に塗る。白く輝く肌にし、ホクロを消す。

【補】

○ 医学系療法である。

[44]

【原文】

『如意方』云。去胎術。以守宮若蛇肝醢和、塗齊、有子即下。永无復有。(『醫心方』卷二十二・治任婦欲去胎方第三十七)

【書き下し】

『如意方』に云ふ。胎を去る術。守宮(①)と蛇の肝の醢(ほぞ)とを和し、齊(ほぞ)に塗れば、子あるも即ち下す。永く復あることなし。

【注】

- ① ヤモリ。
- 【現代語訳】 『如意方』に言う。墮胎術。ヤモリとヘビの肝臓の塩辛を混ぜ合わせて、(それに塗れば、妊娠していても、すぐに(胎児は)下る。再び子(ができること)はない。
- 【補】

○ 呪術系医療である。

○ 『萬畢術』二〇に「守宮塗臍、婦人無子。」〔注〕取守宮一枚、置甕中、及蛇皮、以新布密裹之、懸于陰處百日。治守宮・蛇皮分等、以唾和之、塗婦人臍。磨令温、即無子矣。（守宮を臍に塗れば、婦人子なし。〔注〕守宮一枚を取りて、甕中に置き、蛇皮を及ぼし、新布を以て密に之を裹み、陰処に懸ること百日。守宮・蛇皮を分等に治め、唾を以て之を和し、婦人の臍に塗る。磨きて温からしむれば、即ち子なし。）とある。葉德輝は『萬畢術』の本条に対し、『醫心方』は提示していない。

〔45〕

【原文】

又。煮桃根、令極濃、以浴及漬膝、胎下。〔『醫心方』卷二十二・治任婦欲去胎方第三十七）

【書き下し】

又。桃の根を煮て、極めて濃くせしめ、以て浴びて膝を漬くるに及べば、胎下る。

【現代語訳】

又。桃の根を非常に濃く煮出した汁を準備して、それを膝をつけるほどに浴びれば、胎児は下る。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔46〕

【原文】

『如意方』。食宜男草花、即生男。〔『醫心方』卷二十四・變女爲男法第四）

【書き下し】

『如意方』。宜男草〔①〕の花を食べれば、即ち男を生む。

【注】

① 萱草（ワスレグサ）の異名。

【現代語訳】

『如意方』。ワスレグサの花を食べれば、すぐに男の子を生む。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 「宜男（宜しく男なるべし）」という名称に困ったものと考えられる。次の〔47〕も同じ。

〔47〕

【原文】

一云。任身時帶之、即生男。〔『醫心方』卷二十四・變女爲男法第四）

【書き下し】

一に云ふ。任身〔①〕の時に之〔②〕を帯びれば、即ち男を生む。

【注】

① 「任身」は「妊娠」に同じ。

② 宜男草の花。

【現代語訳】

一にいう。妊娠中に（ワスレグサの花を）身につけていれば、すぐに男の子を生む。

【補】

○ 呪術系処方である。

[48]

【原文】

又方。用烏鷄左翼毛廿枚、置女人席下、即男。〔醫心方〕卷二十四・變女爲男法第四）

【書き下し】

又方。烏鷄の左翼の毛廿枚を用て、女人の席の下に置けば、即ち男あり〔①〕。

【注】

① 卷二四第四の流れから、「即男」を「男の子を生む」と解しておく。

【現代語訳】

又方。黒い鶏の左の翼の羽二十枚を準備して、（それを）女性の敷物の下に置けば、すぐに男の子を生む。

【補】

○ 呪術系処方である。

[49]

【原文】

又方。取雄鴨翅毛二枚、着婦人臥蔭下。勿令知。〔醫心方〕卷二十四・變女爲男法第四）

【書き下し】

又方。雄鴨の翅毛〔①〕二枚を取りて、婦人の臥蔭の下に着く〔②〕。知らしむるなかれ。

【注】

① 鳥の翼の羽。

② 卷二四第四の流れから、上記の処方で男の子を生むと解しておく。

【現代語訳】

又方。雄鴨の羽二枚を取り、婦人のベッドの下に置く。（すぐに男の子を生む）知られてはいけない。

【補】

○ 呪術系処方である。

[50]

【原文】

『如意方』云。欲得美色細腰術。三樹桃花陰干、下篩。先飯、日三、服方寸匕。〔醫心方〕卷二十六・美色方第二）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。美色細腰を得んと欲する術。三樹桃の花〔①〕もて陰干し、篩に下す。飯するに先だちて、日に三たび、方寸匕を

服す。

【注】

① ひとまず三本の桃の木に咲いた花と解しておくが、「三」には東方の意もあり、その場合、桃の木の東方にのびた枝に咲いている花となる。ここで後者の意を取らなかったのは、『萬畢』の場合、

「東方」と明示することによる。ただし、「三」を東方とする用例は『黄帝内經素問』に見えることから、東方とする解釈も否定できない。

【現代語訳】

『如意方』に言う。細い腰の美人になる術。三本の桃の花を準備して、それを陰干しして、（搗いて粉末にして）篩にかける。一日三回食前に方寸匙で一杯分を服用する。

【補】

○ 呪術系処方である。

【51】

【原文】

悦面術。杏人一升・胡麻去皮搗屑五升、合膏煎、去滓。内麻子人半升更煎、彈々正白下之。以脂面、令耐寒、白悦光明。致神女下。

（『醫心方』卷二十六・美色方第二）

【書き下し】

悦面術。杏人一升・胡麻の皮①を去りて搗きし屑五升、合して膏と煎じ、滓を去る。麻子人②半升を内れ更に煎じ、彈々③正白にして之を下す。以て面に脂すれば、寒さに耐へ、白悦光明な

らしむ。神女を致し下すがごとし。

【注】

① 杏人（仁）は『神農本草經』の下薬に、胡麻は上薬に記載されている。また、胡麻については「肌肉を長ず」という記述が見える。

② 麻の種の仁。

③ 札記により「彈」を「殫」に改めた。「殫殫」はことごとく、あまねく。

【現代語訳】

顔色をよくする術。杏仁一升と、皮を取り除き粉末にした胡麻五升を準備して、それを脂肪と混ぜ合わせて煮詰め、滓を取る。麻の種の仁半斤を入れ、さらに煮詰め、ことごとく白くなったら火から下ろす。これを顔に塗ると、寒さに耐えられるようになり、白く輝く肌になる。神女が降りてきたかのようなのである。

【補】

○ 医学系処方である。

○ 『萬畢術』一六にも「悦面術」の記載はあるが、『太平御覽』卷九五九及び『經史証類本草』卷一二による。葉徳輝は『醫心方』卷二六が引く『葛氏方』を提示している。参考として両文を挙げしておく。

『萬畢術』一六「藥令面悦。〔注〕取藥葉・三寸土・瓜三枚・大棗七枚、膏和塗面、不得四五日、立悦矣。先以湯洗面、乃傳藥。〔藥〕は面をして悦せしむ。〔注〕藥の葉三寸・土瓜三枚・大棗七枚を取りて、膏もて和して面に塗れば、四五日を待ずして立ちどころに悦す。先づ湯を

以て面を洗ひ、乃ち藥を傳く。」

『葛氏方』「藥末酒和塗面。厚粉上、勿令見風。三日即白。(藥の末を酒と和して面に塗る。厚く上に粉して、風を見しむることなかれ。三日にして即ち白し。)(『醫心方』卷二六所引)

〔52〕

【原文】

『葛氏方』云。令人身體香方。白芷・薰草・杜若・薇銜・蒿本、凡等分、末、蜜和。旦服如梧子三丸、暮四丸。廿日身香。(『醫心方』卷二十六・芳氣方第三)

【書き下し】

『葛氏方』に云ふ。人の身体をして香らしむる方。白芷・薰草・杜若・薇銜・蒿本(①)もて、凡そ等分し、末にし、蜜もて和す。旦に梧子(②)の如き三丸を服し、暮に四丸。廿日にして身香る(③)。

【注】

① 順に、ハナウド、蕙草(カオリグサ)、ヤブシヨウガ、ヤブレガサ、ソラシ。このうち白芷・杜若・薇銜・蒿本は『神農本草経』の中葉に記載されている。

② 梧桐(アオギリ)の実。

③ 注に「今案ずるに、『如意方』に云ふ。「昔候、昭公此の薬を服し、人の上に坐すれば、一座悉く香る」と。(今案、『如意方』云。昔候昭公服此薬、坐人上、一座悉香。)」とあり、『如意方』に同文があつたことがわかる。

【現代語訳】

『葛氏方』に言う。人の体を香らせる方法。ハナウド、カオリグサ、ヤブシヨウガ、ヤブレガサ、ソラシを準備して、それらを等分し、粉末にして蜜と混ぜ合わせる。朝にアオギリの実ぐらいの(大きさの)丸薬(にして、それ)を三粒、夕方に四粒服用する。二〇日で体がいい香りになる。

【補】

○ 医学系処方である。

〔53〕

【原文】

『如意方』云。香身術。瓜子・松皮・披大棗(①)、分等、末。服方寸匕、日再。衣被香。(『醫心方』卷二十六・芳氣方第三)

【書き下し】

『如意方』に云ふ。香身の術。瓜子・松皮・披ひきし大棗もて、分等し、末にす。方寸匕を服すこと、日に再びす。衣香を被る。

【注】

① 大棗は『神農本草経』の上葉に記載がある。

【現代語訳】

『如意方』にいう。体を香らせる術。瓜の種、松の皮、開いて乾燥したナツメの実を準備して、それを等分し、粉末にして、一日二回、方寸匙で一杯分ずつを服用する。衣服が香るようになる。

【補】

○ 医学系処方である。

〔54〕

【原文】

『如意方』云。令人不昏忘術。菖蒲・遠志・茯苓、分等、末。服方寸匕、日三。（『醫心方』卷二十六・益智方第四）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。人をして昏忘〔①〕せざらしむる術。菖蒲・遠志・茯苓〔②〕もて、分等し、末にす。方寸匕を服すこと、日に三たびす。

【注】

① 頭が呆けて物忘れをすること。

② 順にショウブ・ヒメハギ・マツホド。いずれも『神農本草経』の上薬に記載がある。菖蒲と遠志については、「不忘」の記述が見える。

【現代語訳】

『如意方』にいう。物忘れを防ぐ術。ショウブ、ヒメハギ、マツホドを準備して、それを等分し、粉末にする。（それを）一日三回方寸匙の一杯分を服用する。

【補】

○ 医学系療法である。

〔55〕

【原文】

『如意方』云。令人相愛術。取履下土作三丸、密着席下。佳。（『醫心方』卷二十六・相愛方第五）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。人をして相愛せしむる術。履下の土〔①〕を取りて三丸を作り、密ひそかに席下ひそかに着く。佳し。

【注】

① 踏んでいた土、或いは靴底に付着していた土、いずれともとれるが、とりあえず後者で解釈しておく。

【現代語訳】

『如意方』にいう。人を相愛させる術。靴底に付着していた土を取り、丸薬を三つ作る。それをこっそり敷物の下に入れておく。効果がある。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔56〕

【原文】

又方。戊子日、取鵲巢屋下土、焼作屑、以酒共服、使夫婦相愛。（『醫心方』卷二十六相愛方第五）

【書き下し】

又方。戊子の日、鵲の巢屋の下の土を取り、焼きて屑くずと作し、酒を以て共に服せば、夫婦をして相愛せしむ。

【現代語訳】

又方。戊子の日に、鵲の巢の中の下の方にある土を準備して、（それを）焼いて粉状にし、酒と一緒に夫婦で飲めば、夫婦を相愛にさせる。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『淮南萬畢術』九に「鵠腦令人相思。」〔注〕取雌雄鵠各一、燻之四道通。丙寅日與人共飲酒、置腦酒中、則相思也。（鵠の腦は人をして相思はしむ。〔注〕雌雄の鵠各一を取り、之を四道通に燻く。丙寅の日に人と共に飲酒するに、腦を酒中に置けば、則ち相思はしむ。）とある。

〔57〕

【原文】

又方。取婦人頭髮廿枚燒、置所眠床席下、即夫婦相愛。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五

【書き下し】

又方。婦人の頭髮〔①〕廿枚を取りて焼き、眠むる所の床席の下に置けば、即ち夫婦相愛す。

【注】

① 『神農本草経』の上薬に記載がある。

【現代語訳】

又方。婦人の頭髮を二十本取って焼き、それを（妻が）眠っているベッドの下に置くと、すぐに夫婦相愛となる。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔58〕

【原文】

『如意方』云。令人相憎術。取馬髪・犬毛、置夫婦床中、即相憎。〔醫心方〕卷二十六相愛方第五

【書き下し】

『如意方』に云ふ。人をして相憎ましむ術。馬髪・犬毛を取りて、夫婦の床中に置けば、即ち相憎む。

【現代語訳】

『如意方』にいう。人を互いに憎ませる術。馬のたて髪と犬の毛を準備して、それを夫婦のベッドの中に置けば、すぐに（その夫婦は）仲違いする。

【補】

○ 呪術的処方である。

○ 『淮南萬畢術』三九に「馬毛犬尾、親友自絶。」〔注〕取馬毛犬尾、置朋友衣中、若夫婦衣中。自相憎矣。（馬毛・犬尾は、親友をして自ずから絶たしむ。〔注〕馬毛・犬尾を取りて、朋友の衣の中、若しくは夫婦の衣の中に置く。自ずから相憎む。）とある。『萬畢術』では（文）が親友、〔注〕が夫婦となっている。『如意方』は『萬畢術』の注に等しい。

〔59〕

【原文】

又云。令人不思術。遠行、懷竈土、不思故郷。〔醫心方〕卷二十六相愛方第五

【書き下し】

又云ふ。人をして思はざらしむる術。遠行するに、竈の土を懐にせば、故郷を思はず。

【現代語訳】

又いう。人をおぼなくさせる術。遠くへ行く時、竈の土を懐に入れて持っていけば、ホームシックにかからない。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『淮南萬畢術』六に「竈之土不思故郷。〔注〕取竈前三寸方半寸、取中土持之、遠出令人不思故郷。（竈の土は故郷を思はず。〔注〕竈の前の三寸方半寸を取りて、中の土を取りて之を持てば、遠くに出づるも、人をして故郷を思はざらしむ。）」とある。

〔60〕

【原文】

『如意方』止淫術。三歳白雄鶏兩足距、燒末。與女人飲之。淫即止。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五

【書き下し】

『如意方』。淫を止むる術。三歳の白雄鶏の兩足の距①もて、燒きて末にす。女人に与へて之を飲ましむ。淫即ち止む。

【注】

① 鶏の蹴爪。

【現代語訳】

『如意方』。淫行を止むる術。三歳の白い雄鶏の兩足の蹴爪を準備

して、それを焼いて粉末にし、女性に与えて飲ませる。淫行はすぐ止まる。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔61〕

【原文】

又云。欲令淫婦一心方。取牡荊實、與吞之、則一心矣。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五

【書き下し】

又云ふ。淫婦をして一心ならしめんと欲する方。牡荊①の実を取りて、与へて之を吞ましめば、則ち一心なり。

【注】

① ニンジンボク。

【現代語訳】

又いう。淫乱な女性を一途にする方法。ニンジンボクの実を採つて女性に与え飲ませると、一途になる。

【補】

○ 医学系処方である。

〔62〕

【原文】

又云。☰☳☰。陽符。朱書之、入心。☷☷☷。陰符。此欲絶淫情、

入腎。朱書之可服。此二符、以丹塗竹裏白淫令赤、乃以空青書符、吞之。淫即絶矣。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五)

【書き下し】

又云。陽符。之を朱書して、心に入る。陰符。

此れ淫情を絶たんと欲すれば、腎に入る。之を朱書して服すべし。此の二符は、丹を以て竹の裏の白淫①に塗りて赤くならしめ、乃ち空青②を以て符に書して、之を吞む。淫即ち絶す。

【注】

① 竹の中の白い薄皮。

② 藍銅鉞。『神農本草經』の上薬に記載がある。

【現代語訳】

又いう。陽の御札。これを朱書きして、心臓の所にあて

る。陰の御札。これは淫情を絶やしたいと思つたら、腎臓の所にあてる。朱書きして服用する。この二種の御札は竹の中の白い薄皮を丹で赤く染め、空青でお札の文字を書く。これを飲めば、浮気心はなくなる。

【補】

○ 呪術系処方である。

[63]

【原文】

又云。驗淫術。五月五日若七月七日、取守宮、張其口、食以丹。視腹下赤止、瓮中陰干。百日出、少々治之。付女身、拭、終不去、

若有陰陽事、便脫。曰、守宮蠅蜒也、牝牡新交三枚、良之。〔醫心方〕卷二十六相愛方第五)

【書き下し】

又いう。淫を験する術。五月五日、若しくは七月七日、守宮を取りて其の口を張り、食はすに丹を以てす。腹下の赤くなるを視れば止め、瓮中に陰干しす。百日にして出だし、少々之を治す。女の身に付け、拭へば、終に去らず。若し陰陽の事あらば、便ち脱す。曰く①「守宮は蠅蜒なり。牝牡の新たに交わるもの三枚、之を良とす」と。

【注】

① 文意より、ひとまず「注曰」として解釈しておく。

【現代語訳】

又いう。淫行を確かめる術。五月五日、或いは七月七日に、ヤモリを準備して、その口を張り、丹を食せさせる。腹の下が赤くなってきたら止め、カメの中に入れて陰干しする。百日たつたら出し、少しだけ練り上げる。それを女の肌にかけて拭へば、(その赤い色は)とることができない。もし男女の交わりがあつたならば、(赤い色は)消えてしまう。(注に)「守宮は蠅蜒である。新たに交尾した雌雄を(それぞれ)三匹が、効果がある」と。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『萬畢術』二二に「守宮飾女臂有文章。〔注〕取守宮新合陰陽者

牝牡各一、藏之瓮中、陰乾百日。以飾女臂、則生文章。與男子合陰陽輒滅去。(守宮もて女の臂に飾れば文章あり。〔注〕守宮の新たに陰陽

を合せし者牝牡各一を取りて、之を甕中に蔵し、陰乾すること百日。以て女の臂に飾れば、則ち文章を生ず。男子と陰陽を合せば輒ち滅去す。」とある。『萬畢術』の（文）と（注）が融合して『如意方』の文が作られ、さらに期日指定の要素が付加されていることがわかる。

〔64〕

【原文】

又云。白馬右足下土、著婦人所臥席床下。勿令知。自呼外夫姓名也。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五

【書き下し】

又云ふ。白馬の右足の下の土もて、婦人の臥せし所の席床の下に著く。知らしむるなかれ。自ら外夫の姓名を呼ぶなり。

【現代語訳】

又いう。白馬の右足の下の土を準備して、妻が寝ているベッドの下に付けておく。（妻に）知られてはならない。（妻が）浮気相手の名前を言う。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『萬畢術』一五に自白剤に関する用例が見える。

〔65〕

【原文】

『如意方』云。止妬術。可以杜蕙苳二七枚、與吞之。杜蕙苳、相重者、是也。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五

【書き下し】

『如意方』に云ふ。妬を止むる術。牡の蕙苳①二七枚を以て、与へて之を吞ましむべし。牡の蕙苳とは、相重なる者、是なり。

【注】

① ハトムギ。記載はないが、その仁を指すと思われる。『神農本草経』の上薬に記載がある。

【現代語訳】

『如意方』にいう。嫉妬を止める術。牡のハトムギ（の実）を十四个を準備して、それを飲ませればよい。牡の蕙苳とは互いに重なっているものがそれである。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔66〕

【原文】

又方云。其月布囊蝦蟇一枚、盛著瓮中、蓋之。埋厠左、則不用夫。〔醫心方〕卷二十六・相愛方第五

【書き下し】

又方に云ふ。其の月布①もて蝦蟇一枚を囊み、瓮中に盛り著け、之に蓋す。厠の左に埋むれば、則ち夫を用いず。

【注】

① 経血の付着した布。

【現代語訳】

又方にいう。（嫉妬する女性の）経血が付着した布でガマを一匹包み、

カメの中に置いてふたをする。それをトイレの左側に埋めると、夫に気をかけなくなる。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『萬畢術』七に月布（赤布）の用例が見える。

〔67〕

【原文】

『如意方』云。埋牛角宅中、富。〔醫心方』卷二十六・求富方第

六）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。牛角を宅中に埋むれば、富む。

【現代語訳】

『如意方』にいう。牛の角を家の下に埋めると、金持ちになる。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔68〕

【原文】

又方。埋鳥於庭中、令富。〔醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。鳥を庭中に埋むれば、富ましむ。

【現代語訳】

又方。鳥を庭に埋めると、（その人を）金持ちにさせる。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔69〕

【原文】

又方。埋鹿鼻舍角、致財。〔醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。鹿の鼻を舍の角に埋むれば、財を致す。

【現代語訳】

又方。鹿の鼻を舍屋の角に埋めると、財産をなす。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔70〕

【原文】

又方。埋鹿骨門中廁、得錢。〔醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。鹿の骨を門中の廁〔①〕に埋むれば、錢を得。

【注】

① 「廁」を便所と解すると「門中」の表記と合わないのので、ここでは「側（かたわら）」として解釈しておく。

【現代語訳】

又方。鹿の骨を門の内側のあたりに埋めると、お金を手に入れる（ことができる）。

【補】

○呪術系処方である。

〔71〕

【原文】

又方。五穀各二升埋堂中、聚錢財。〔『醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。五穀各おの二升もて堂中に埋むれば、錢財を聚む。

【現代語訳】

又方。五穀を各二升ずつ準備し、表座敷の下に埋めれば、錢や財産を集める（ことができる）。

【補】

○呪術系処方である。

〔72〕

【原文】

又方。李木灰三斤、掘門中三尺埋之、令富百倍。〔『醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。李木の灰三斤もて、門中三尺を掘りて之を埋むれば、富をすももの木の炭を三斤準備し、門の深さ三尺の所に埋めるして百倍せしむ。

【現代語訳】

又方。すももの木の炭を三斤準備し、門の深さ三尺の所に埋める

と、（その人の）富を百倍にさせる。

【補】

○呪術系処方である。

〔73〕

【原文】

又方。立春日、取富家田中土塗竈、令人得富。〔『醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。立春の日、富家の田中の土を取りて竈に塗れば、人をして富を得しむ。

【現代語訳】

又方。立春の日に、お金持ちの家の田の土を採ってかまどに塗ると、その人に富を手に入れさせる。

【補】

○呪術系処方である。

〔74〕

【原文】

又方。春甲午・乙亥、夏丙辰・丁丑、秋庚子・辛亥、冬壬寅・癸卯、夜半向北斗祝。「欲得△物。」即自得。〔『醫心方』卷二十六・求富方第六）

【書き下し】

又方。春は甲午・乙亥に、夏は丙辰・丁丑に、秋は庚子・辛亥に、

冬は壬寅・癸卯に、夜半 北斗に向ひて祝す。「ム物」①を得んと欲す」と。即ち自ずから得。

【注】

① ここでは呪文を唱える者が手に入れたものをさす。

【現代語訳】

又方。春は甲午・乙亥の日に、夏は丙辰・丁丑の日に、秋は庚子・辛亥の日に、冬は壬寅・癸卯の日に、それぞれ夜半に北斗七星に向かつて「□□を手に入れたい」と呪文を唱える。すぐに（欲しい物が）自然と手に入る。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔75〕

【原文】

又方。二月上壬日、取道中土、井花水和爲泥、塗屋四角、富蠶。

〔『醫心方』卷二十六・求富方第六〕

【書き下し】

又方。二月上壬の日、道中の土を取り、井花水①もて和して泥と爲し、屋の四角に塗れば、蚕に富む。

【注】

① 寅卯の間（午前四時から六時）に汲んだ井戸水のこと（李杲『食物本草』水類による。）

【現代語訳】

又方。二月の上壬日に道の土を採り、朝一番に井戸から汲んだ水

と混ぜて泥にし、それを家屋の四隅に塗ると、蚕が増える。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『萬華術』九九に「二月上壬日、取道中土・井華水、和泥蠶屋四

牖、則宜。蠶神名苑蠶。二月上壬の日、道中の土・井華水を執りて、和して蠶屋の四牖に泥すれば、則ち蠶に宜し。蠶神、名は苑蠶」とある。葉徳輝は『萬華術』の本条に対し、『醫心方』は提示していない。

〔76〕

【原文】

『如意方』云。以黄石六十斤、置亥子間地及鷄栖下、宜六畜。〔『醫心方』卷二十六・求富方第六〕

【書き下し】

『如意方』に云ふ。黄石①六十斤を以て、亥子の間の地②及び鷄の栖の下に置けば、六畜③に宜し。

【注】

① 方解石（カルサイト）。
② 亥子は陰曆十月の節日をさすが、ここでは方位をさすものと思われる。
③ 六種類の家畜。馬・牛・羊・豕・犬・鶏。

【現代語訳】

『如意方』にいう。方解石六十斤を準備して、それを（家の）北北西から北の間の地面、もしくは鶏の巢の下に置けば、家畜によい。

【補】

○ 呪術系処方である。

〔77〕

【原文】

『如意方』云。雨不濕衣術。取蜘蛛、置瓦甕中、食以豕脂百日。煞蜘蛛以塗手巾、大雨不能濡。〔『醫心方』卷二十六避雨濕方第十）

【書き下し】

『如意方』に云ふ。雨ふるも衣を湿めらさざる術。蜘蛛を取りて、瓦甕の中に置き、食はすに豕脂を以てすること百日。蜘蛛を殺して以て手巾に塗れば、大いに雨ふるも濡らすあたはず。

【現代語訳】

『如意方』に云う。雨が降っても衣を濡らさない術。クモを準備して、カメの中に入れ、ブタの脂を百日間食べさせる。そのクモを殺してハンカチに塗れば、激しく雨が降っても（水をはじいて）濡れない。

【補】

○ 科学系処方である。

○ 『淮南萬畢術』一八に「蜘蛛塗布、而雨自晞。〔注〕取蜘蛛置甕中、食以膏百日。煞以塗布、而雨不能濡也。（蜘蛛は布に塗れば、而ち雨自ずから晞く。〔注〕蜘蛛を取りて甕中に置き、食はすに膏を以てすること百日。殺して以て布に塗れば、而ち雨ふるも濡らすあたはざるなり。）」とある。

〔78〕

【原文】

又方。赤腹蜘蛛二七枚、搗取汁、以染布巾。以覆身、即不沾也。〔『醫心方』卷二十六・避西雨濕方第十）

【書き下し】

又方。赤腹の蜘蛛二七枚もて、搗きて汁を取り、以て布巾を染む。以て身を覆へば、即ち沾れざるなり。

【現代語訳】

又方。腹の赤いクモ十四匹を準備して、搗いて汁を採り、それを布地に塗る。その布で体を覆うと濡れない。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 前条に示した『萬畢術』一八と同質のものであるが、「赤腹蜘蛛二七枚」という限定がある一方で、百日の間豚の脂を食わすという処方が消失しており、前条の科学的な要素が見られない。

〔79〕

【原文】

『如意方』。治噎術。春杵頭糠、置手巾角以拭齒、立下。〔『醫心方』卷二十九・治食噎下方第二十七）

【書き下し】

『如意方』。噎①を治す術。春杵の頭の糠②もて、手巾の角に置きて以て齒を拭へば、立ちどころに下る。

【注】

① のどに食べ物詰まらせること。

② 『化書』二(術化)の四(水竇)に「杵糠は以て噎を療すべし(杵糠可以療噎。)」とあり、病名も一致することから、ここでは杵の頭部にこびりついた糠と解しておく。「頭糠」を頭部批糠疹(フケ症)を示すものとして解することもできるが、ここでは取らない。

【現代語訳】

『如意方』のどに食べ物詰まった状態を治す術。杵の頭部にこびりついた糠を準備して、ハンカチの隅に置いて、歯を拭くと、すぐに(喉に詰っていたものが)落ちていく。

【補】

○ 呪術系処方である。

【80】

【原文】

又方。鷓鴣羽、燒、末、水服半錢上。(『醫心方』卷二十九・治食魚骨哽方第四十)

【書き下し】

又方〔①〕。鷓鴣〔②〕の羽もて、焼きて末とし、水もて半錢上を服す。

【注】

① 本条の出典は『葛氏方』であるが、注に「今案ずるに、『集驗方』は尿を用い、『如意方』は骨を用う(今案、『集驗方』用尿、『如意方』用骨)」とあり、『如意方』に同旨の文があったことがわかる。

② ウ。

【現代語訳】

又方(葛氏方)。ウの羽を準備して、それを焼いて粉末にし、貨幣の半分の量を水で服用する。

【補】

○ 呪術系処方である。

○ 『葛氏方』『集驗方』『如意方』でそれぞれ使用するのがウの羽

・糞・骨と異なっている。伝播の過程で多様化していったものと思われる。